

實 驗

梨 栽 培 精 義

前新潟県農事試験場園芸部長

田 野 寛 一 著

實 驗

梨 栽 培 精 義

前新潟縣農事試驗場園藝部長

田 野 寬 一 著

東 京 ・ 書 肆

株 式 會 社

養 賢 堂 發 行

— 1958・增訂第5版 —

序

從來果樹に關する著書はその數も頗る多く、それ等はそれぞれの特色を持つてゐるが、或は理論に走り實際に疎く、又實際に精通せる著書では理論的の説明が不十分なようである。これ等の事實は過去における園藝の發達が諸外國の模倣的で我が國の氣候風土の實態に即さなかつたことに起因する。これ等の原因は本書の内容において指摘したように、指導者の見解と實際栽培者との過渡期における経過として止むを得なかつたと思われる。又過去における果樹栽培の研究は主として局部的の研究は相當に行われたにもかゝらず果樹栽培の一生を通じてのいわゆる一貫性のある研究の缺けたことに起因するものと斷ぜざるを得ない。筆者はさきに發表した「葡萄栽培の實際」において指摘したように、今後の果樹栽培は栽培の全段階を通じて、理論と實際との合致し一貫した體系を持つ栽培を提唱したのである。例えば土壤學は單に土壤の物理及び化學的性質の研究に止まらず、栽培學と關聯したものであり、これを園藝學では果樹栽培の部面に充分取り入れることである。

以上述べた事項は著者年來の希望であるが、本書はかゝる意味において出来る限り、理論と實際の場合に重點をおき梨栽培に對する科學性を生かそうとして、不必要と思われる數字をも出来る範圍内において羅列し、また寫眞及び圖版を多くして説明の足りない所を補足しようと努めたものである。

本書の内容は、著者の研究を主としたものであるが、尙先輩の研究業績を引用または轉載せる項も多く、この點は原著者に對して厚く感謝する。しかし著者は永らく新潟縣農事試驗場に奉職中であるので、本書も勢ひ北陸地方の對照となり勝ちであるため、閱讀される時はその心構えで又利用される場合も適宜加減して頂きたい。

尙、本書出版に當つては、及川養賢堂社長の特別な御配意と當園藝部職員の御協力による所が甚大であつた。記して深謝の意を表するものである。

昭和 24 年 5 月

新潟縣新津、秋葉山々廬にて

著 者 識

目 次

第 1 章 總 說	1	第 1 項 枝梢の發育	37
第 1 節 緒 言	1	第 2 項 果實の發育	39
第 1 項 日本における梨の栽培沿革とその品種 ..	3	第 3 項 枝梢の發育と果實の發育との關係	40
第 2 項 梨栽培の過去及び現況	8	第 6 節 梨の花芽分化に關する事項	41
第 2 節 栽培梨の分類學上の位置	11	1. 花芽の分化期	41
第 3 節 梨の各器官の形態とその名稱	14	2. 花芽の分化期とその後の發育經過との關聯性 ..	42
第 1 項 花	14	第 7 節 梨の交配と結實に關する諸問題	43
第 2 項 葉	16	1. 梨の交配による親和の強弱に就て	43
1. 葉形	17	2. 自家不親和性の強弱に就て	45
2. 鋸齒	18	第 1 項 授粉時における花柱の數と果型との關係 ..	48
第 3 項 芽及び枝梢の種類	19	第 8 節 日本梨品種改良法	51
1. 芽	19	1. 日本における梨の品種改良事業の發達	52
2. 枝梢	21	2. 新品種育成計畫の樹立	54
第 4 項 果實の諸形質	24	第 9 節 栽培に關係ある主要器具	62
1. 外部的の諸形質	24	第 2 章 栽培編	65
2. 内部的形質	31	第 1 節 各種の氣象要素と梨栽培との關係 ..	65
第 5 項 根の發育と分布について	32	第 1 項 氣溫と梨栽培との關係	65
1. 根群の分布	32	第 2 項 雨量と梨栽培との關係	71
2. 根の活動時期	35		
第 4 節 開花期, 落花期, 落葉期について ..	35		
第 5 節 果實及び枝梢の發育相に關する事項	37		

(2) 目 次

第3項	梨栽培と日照との関係	76	13)	巾着	98
第4項	梨の雪害と冬季管理	77	14)	相模	99
第2節	梨栽培と土質との関係	80	15)	二宮白梨	100
第1項	梨園土壤に関する2~3の問題	80	16)	早生幸蔵	101
1.	梨園土壤の組成	80	17)	青龍	102
2.	土壤中への通氣が根の伸長に及ぼす影響	80	18)	松島	103
3.	果樹園の土壤水分と梨との関係	81	19)	長十郎	104
4.	土壤中の酸度と梨樹との関係	82	20)	二十世紀	105
5.	果樹園土壤の浸蝕	82	21)	幸蔵	106
6.	土壤中における撒布藥劑の殘量について	83	22)	太白	107
第3節	品 種	84	23)	菊水	108
第1項	梨の品種選擇上の注意	84	24)	今村夏	109
第2項	日本梨品種の解説	86	25)	明月	110
1.	早生種	86	3.	晩生種	111
1)	君塚早生	86	26)	新高	111
2)	八雲	87	27)	世界一	112
3)	王冠	88	28)	泰平	113
4)	石井早生	89	29)	天の川	114
5)	市原早生	90	30)	新興	115
6)	獨逸	91	31)	早生赤	116
7)	8號	92	32)	今村秋	117
8)	北海	93	33)	晩三吉	118
9)	博多寺	94		中國梨	119
10)	早生長十郎	95	1.	晩生種	119
2.	中生種	96	1)	紅梨	119
11)	祇園	96	2)	萊蕪慈梨	120
12)	赤穂	97	3)	鴨梨	121
				西洋梨	122
			1.	早生種	122
			1)	ポーレー・ジツファ	122
			2)	ドクトル・ジュイル・ギューヨ	123
			2.	中生種	124

3) パートレット	124
4) フレミツシユ・ピユ ーチー	125
5) デユセズ・ダングレ ーム	126
6) ボーレー・クレルジ ワー	127
3. 晩生種	128
7) イースターボーレ ー	128
8) ラ・フランス	129
第 4 節 苗木の養成法	130
第 1 項 優良苗木としての條 件	130
第 2 項 砧木の養成	131
1. 砧木の種類とその特性	131
2. 接木の親和力について	134
3. 實生法	136
4. 挿木について	139
第 3 項 接木	139
1. 嫁接法	139
2. 高接法	145
3. 芽接法	147
第 5 節 苗木の栽植	149
第 1 項 苗木植付の時期	149
第 2 項 栽培の距離	150
第 3 項 栽植の方法	151
第 6 節 整枝及び剪定	152
第 1 項 整枝の方法	152
1. 整枝に関する基礎事項	152
2. 梨樹の生態と整枝との 関係	153
3. 梨樹の栽培條件と整枝 との関係	154

第 2 項 整枝の方法	154
1. 棚作り整枝法	154
第 3 項 梨棚の架設法	158
1. 幾見式垂線棚架設法	161
2. 甲州式棚架設法	164
第 7 節 剪 定	165
第 1 項 剪定に関する基礎的 事項	165
1. 結果の習性	165
2. 剪定が樹の生長に及ぼ す影響	166
第 2 項 夏季剪定の技術的事 項	171
1. 除芽	172
2. 剪枝	173
第 3 項 冬季剪定	179
1. 1 年生の葉枝	179
2. 結果枝及び結果枝群	181
3. 主枝	182
4. 果樹園の清掃	182
5. 西洋梨の剪定法	183
6. 西洋梨の剪定作業	183
7. 結果枝及び主枝の更新	185
8. 主枝の更新	186
第 8 節 摘 果	189
第 1 項 摘果に関する基礎的 事項	189
1. 摘果の目的	189
2. 1 花芽中の花の数	189
3. 開花始めより開花終了 に至る日数	189
4. 1 花叢中における幼果の 優劣	190
第 2 項 摘果作業	191

(4) 目 次

1.	摘果の方法	191
2.	摘果の時期	195
第 9 節	袋 掛	196
第 1 項	袋掛に關する基礎的 事項	196
1.	病蟲害と袋の紙質との關 係	196
2.	袋の紙質が果實の外觀に 及ぼす影響	98
3.	袋の種類と果實の形質と の關係	200
第 2 項	袋掛作業	204
1.	梨袋の製法	204
2.	袋掛けの時期	206
3.	袋掛けの方法	206
第 10 節	施 肥	207
第 1 項	施肥に關する基礎的 事項	207
1.	梨の生態を把握するこ と	208
2.	施肥技術の考え方	208
第 2 項	肥料要素が果樹に及 ぼす影響	210
第 3 項	肥料要素の施用量	211
第 4 項	肥料の種類とその影 響	213
第 5 項	肥料の配合と施肥方 法	214
第 6 項	施肥の時期	217
第 11 節	土壤の管理	219
第 1 項	中耕及び除草	219
1.	中 耕	219
2.	除 草	220
第 2 項	果樹園の間作と被覆 作物	221

第 3 項	灌水及び排水	222
1.	土壤水分に關する基礎的 事項	222
2.	梨園における灌水の實施 方法	224
3.	排水	225
第 4 項	飛砂の防止について	226
第 3 章	病蟲害編	227
第 1 節	害 蟲	227
1.	なしのつめしんくひむ し	227
2.	なしのおおしんくひ	229
3.	きじらみ	230
4.	みはばち	231
5.	ほしけむし	232
6.	りんごあななみしやく	233
7.	こなかひがらむし	233
8.	おおわたかひからもど き	236
9.	なしのかきかひからむ し	236
10.	さんほーぜかひからむ し	237
11.	あかだに	237
12.	あぶらむし	238
13.	なしのこふきあぶらむ し	239
14.	かくもんはまき	239
15.	ちよつきりぞうむし	240
16.	ぐんばいむし	241
17.	なしのかめむし	242
第 2 節	病 害	243
1.	なしのこくはんびよう	243
2.	なしのあかほしびよう	245

3.	なしのくろほしびよう	246
4.	なしのどうがれびよう	247
5.	せいようなしのしりぐ され	248
第4章	薬剤編	249
第1節	梨の主要薬剤の調 製並使用法	249
1.	殺菌剤	250
1)	石灰ホルドウ液	250
2)	消石灰ホルドウ液	252
3)	王銅(銅製剤1號)	252
4)	クボイド 銅製剤 2號)	253
5)	石灰硫黄合剤	253
6)	銅石鹼液	255
2.	殺蟲剤	256
A.	毒 剤	256
1)	酸性砒酸鉛	256
2)	砒酸石灰	256
B.	接觸剤	257
1)	硫酸ニコチン	257
2)	除蟲菊石鹼水	258
3)	石油浸出除蟲菊石 鹼合剤	259
4)	テリス乳劑	259
5)	テリス石鹼	260
6)	機械油乳劑	260
7)	D. D. T	261
8)	B. H. C	262
3.	補助剤	262

4.	各地に於ける梨薬剤撒 布	263
第5章	收穫編	270
第1項	採 收	270
第6章	梨園の經營と販 賣技術の改善	273
第1節	梨園經營の改善	273
第1項	梨園經營の考え方	273
1.	綜合的の經營計畫をた てること	274
2.	梨栽培の立地條件を再 確認すること	274
第2項	生産費の實態につい て	275
1.	支出金額	276
2.	收入金額	279
第3項	梨園經營の合理化に ついて	280
1.	反當收量を増加を図る こと	280
2.	生産費の引下げについ て	281
第2節	販賣の改善につ いて	282
1.	栽培者の立場からの販 賣改善	282
2.	梨の取扱ひ業者に對す る販賣改善	286

補 稿 (第2版)

第2章 栽培編	289
第3節 品 種	289
第2項 日本梨品種解説	289
(1) ロノ5 (雲井)	289
(2) 新世紀	290
(3) 新潟早生	290
(4) 清 玉	290
(5) リノ30 (翠星)	291
(6) 新 雪	292
第6節 整枝及剪定	293
第2項 整枝及方法	293
(1) オールバック整枝の植付の方法	293
第7節 剪 定	295
第1項 剪定に関する基礎的事項	295
第2項 夏季剪定の技術的事項	295
(1) 夏季剪定の考え方	295
補 稿 (第3版)	
梨栽培の新らしい問題	297
1. 梨の無袋栽培について	297
2. 果樹園における薬剤撒布用配管について	299
(1) ビニールパイプの配管設備	299

(2) ビニールパイプ設置の費用	301
(3) 薬剤撒布に要する労力の比較	302
3. 冬季剪定の考え方 (長果枝の利用について)	303
4. 新らしい農薬について	304
(1) C.C.S. 剤	304
(2) マラソン剤	305
(3) シュラーダン (ベストックス3)	305
(4) クロン (P.C.P.-Na)	306
(5) クロロベンチレート	306

補 稿 (第5版)

梨園の病害虫の共同防除について

1. 病害虫の共同防除の必要性について	309
2. 共同防除の効果について	310
(1) 経済上の効果について	310
(2) 間接の効果について	313
3. 病害虫の共同防除とこれからの問題	313
索 引	315

第 1 章 總 說

第 1 節 緒 言

果樹の栽培技術は米麥栽培技術に比して、より科學的の知識がなければ有利の經營の困難なことは一般の認める所である。それ故果樹栽培を一種の投機的の事業であるとさえ極言するものもある。米麥栽培は祖先傳來の方法でも災害のない限り年々相當の收穫を擧げ得るが、果樹栽培は例え藥劑撒布の時期を失しても、またその量を誤つても、病蟲害の被害は勿論收穫の減少、樹も又被害を受けることは珍らしくない。米麥栽培では自分だけの災害は少ないが、果樹の栽培では隣園は優秀の成績を擧げても、自園はその收穫の半分にも達しないことのあるのは屢々我々の見聞する所である。そしてこのことは1年の災害に止まらず、その後の栽培に影響のあるもので、その例としてはさきに肥料の入手難のために數年前の無肥料栽培が現在の收穫に甚大の影響を與えていることは、當業者自身のよく體驗されている事實である。

この様な諸種の點から論ずれば、果樹の栽培は非常に不安定の企業の如く考えられるが、しかしその技術を高度に活用すればそれだけ、單位面積の利用價值を高め、栽培者の労働能力を累進させるものであつて、この點は普通農事の速く及ばない所である。

從來の果樹栽培は傳統的に經營して來た傾向があつたが、今後の果樹栽培は、今日も又將來も我國の直面してゐる土地の高度利用、労働生産を高める面からも、より科學性を持つ果樹栽培を實施することが大切であると思ふ。

又果物は一種の嗜好品の如く考えられるが、歐米ではその消費高は我が國に比して著しく多く、例えばリンゴの消費量は我が國の1人當 0.383 貫に對し米國では 6.655 貫(淺見氏)であつて、特に英國の如きは氣候の關係上柑

橘の生産が困難であるに係らず、これを輸入して莫大の消費を行つてゐることをみても如何に果物が吾人の日常生活に必要缺くべからざるものであるかがわかると思う。

次に果樹栽培が農業經營の安定性と健實性を持つことも重要なことである。米麥單作では現金収入が季節的で年 1~2 回であるからこれに果樹の現金収入をもつてすれば、米麥の現金収入以外の季節に収入もある。

また農業經營の安全性の面からは、北海道、東北地方にて一層著明の例がある。例えば夏季多雨にて冷涼の氣溫の場合は水稻が冷害を受けるような年には、苹果の作柄が良好であるために、米麥と苹果とを栽培している農家はその經營に健實性があることは、北大の島教授はすでにこれを指摘している。

更に果樹の栽培は、土地利用の點からも重要である。北陸及び東北地帯の果樹栽培は主として平坦地であるが、關西及び四國、九州方面における果樹栽培地は主として傾斜地を使用してある。このような傾斜地には果樹は好適とは言えないが兎に角營利栽培が出来るのである。特に本邦においては、このような果樹を栽培し得る余地は各地に非常に多くあるので、かゝる土地の利用こそ今後の果樹増殖の余地ある所で、これと同時に日本海沿岸に豊富にある砂丘地もまた注目すべき果樹栽培地帯である。

我が國における農業經營形態は過去における自給態勢より脱して世界農業の一環として將來進出されるべきものであるから、果樹園藝は輸出農産物としての意義が深い。従つて輸出し得る果樹は將來大いに發展すると共に國內需給のものは、果樹園藝の發展と共に非常な變化を來すことは考慮しなければならない。

過去においては柑橘、苹果、梨、栗等の輸出も行われたのであるから、これ等果樹の加工方面の研究も重要である。一般に輸出向の果樹は、品質、價額、量、等いろいろの問題があるけれども、これ等を早急に解決し得るような果樹園藝の研究と發展を期すべきである。

次に果樹としての梨栽培の特質を述べれば次の如くである。日本梨の氣候

風土に對する適應性頗る大で、柑橘、リンゴに比して、その栽培地帯は頗る廣く、日本全國何れの地方にても栽培が可能であることは第 1 表にて明かなるごとく、リンゴ及び柑橘は、可成りの制限を受けている。

第 1 表 主要果樹の分布狀況

種 類	關 係 道府縣	備 考
和 梨	46	100 町步
リ ン ゴ	7	以上
柑 橘	27	(昭和 9 年)

栽培の難易から見ると、リンゴ 柑橘に比し割合に技術を要する點が多く、又柵材料に相當の費用を要するをもつて、今後の栽培には柵を廢止するか、一層簡單にして、

風害の防除と、作業の機械化の問題と共に研究する必要がある。

梨は結果期に入ること早く、リンゴ及び柑橘比し 3—5 年位は早いようである。

採取期は 7 月中旬より 10 月下旬に至る長い期間にわたり、また品種によつては貯藏にもたえるからその販賣期間は頗る長い果樹である。特に早生種は盛夏の候に生産されるので、これが需要は相當多く柿及びミカンの出荷される 10 月中旬以後となれば、氣候との關係もあつて、その消費高激減する。しかし大體において長期にわたつて現金収入を見ることが出来る。

輸出果樹としての梨の使命は、すでに述べたように、過去においては、柑橘及びリンゴに次いで輸出されるもので、今後と雖も、臺灣、朝鮮、滿州、その他南方の諸地域にも販賣の可能性があると思われる。特に西洋梨は罐詰事業と共に栽培すればよいと思う。

第 1 項 日本における梨の栽培沿革とその品種

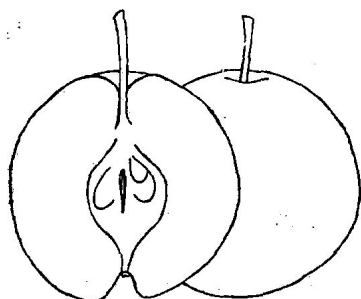
現在本邦に栽培されている梨の種類は、日本梨、西洋梨、中國梨であるが、この中日本梨は野生梨の改良に依りて現今の如き品種が栽培されるに至つたが、西洋梨、中國梨は明治の初年に導入されたもので、本邦における栽培の沿革は比較的新らしい。

日本梨の栽培された記録として最古のものは「日本書記」の持統天皇（西紀

693 年)の章に梨の栽植獎勵した記録があるので、梨を食用として栽植した



(新潟縣 清水氏)



同
上
果
實

第1圖 梨—古賀(Koga)(樹齡90年)(原圖) 法を詳細に述べ、栽培全般に亘

のはこれより余程以前である⁽¹⁾。又菊池氏は各種の記録から推定して本邦における梨の全國的栽培は10世紀以前から行われたものと斷定しているが、栽培品種については明かでない。

恩田氏⁽²⁾に依れば、京都府綴喜郡にては、文治2年(750年頃)に梨を栽培せる記録より見て、本邦に於ける梨栽植の沿革としては古い方である。

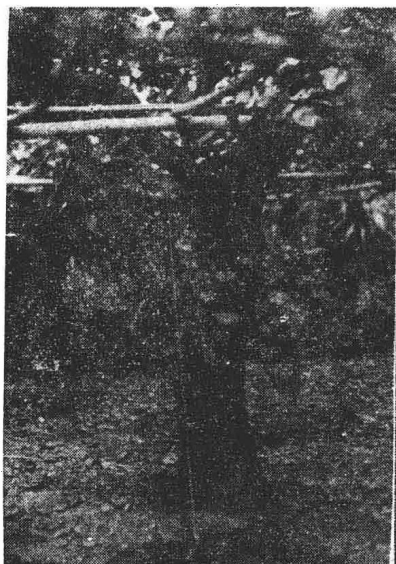
山梨縣東置賜郡八代村⁽³⁾は今より600年前より栽培せられ、龜梨と稱する1品種ありと稱せらる。又新潟縣にては北蒲原郡木崎村は最も栽培の古い地方で、少くとも320年以前に栽培された記録がある。又同縣中蒲原郡茨曾根村(當時東萱場村)に阿部源太夫なる梨栽培家があり、その著書⁽⁴⁾「梨榮造育秘鑑」(天明2年中秋)には當時の梨栽培

(1) 菊池秋雄：果樹園藝學，上卷，養賢堂，1948

(2) 恩田、草野：實驗和洋梨栽培法，博文館，大正6年

(3) 菊池秋雄：日本梨品種改良成績 No. 53，神奈川農試，1927

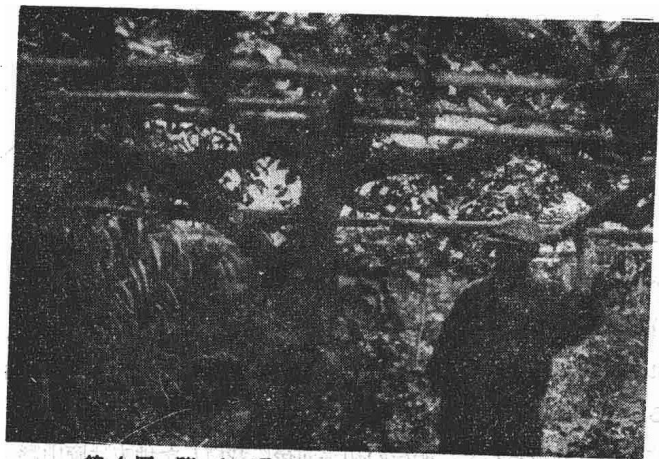
(4) 阿部源太夫：「梨榮造育秘鑑」



第 2 圖 ア ブ ミ (Abumi)
(樹齡 140 年位) (原圖) (新潟縣 清水氏)

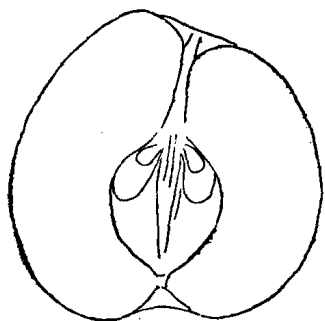


第 3 圖 晩 六 (Okuroku)
(樹齡 130 年) (原圖) (新潟縣 清水氏)



第 4 圖 隨 軒 (Zuiken) (樹齡 120 年位) (原圖)
(新潟縣 清水氏)

る記載と共に、梨の栽植距離は 3.5 間とすべきこと、或は雪國に於いては柵の高さを 6 尺 3 寸とし、降雪なき地方は 5.5 尺を標準とすべき事を記録している。



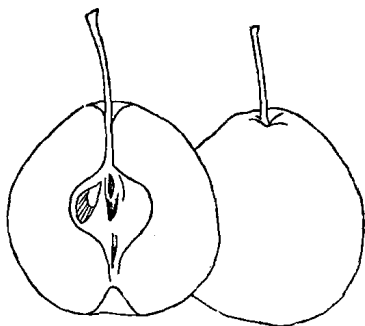
第 5 圖 毬箱 (Maribako) (原圖)
(新潟縣 清水氏)

る。又栽培品種については、早熟種 24 種、中熟種 19 種、晩生種 96 種、計 99 品種を記載しているが、これ等の品種中現在とは同地に殆んど栽培されず、著者は 10 年以前に同縣中蒲原郡龜田町茅野山、清水新一郎氏園に於いて 150 年前後の 2~3 品種の残存せしを調査せるを以てこれを第 1~6 圖に示す。然し最近の調査ではこれ等の品種は全部伐採して現存しない。

即ち、古賀、アブミ、晩六、隨軒、マリバコ、早生三吉等の各種は、現在の品種に比較すれば、その品質においては劣るも興味あるものと思わる。

尙阿部氏著書に記載しある類三 (類産) は、第 7 圖に示せる如く新潟縣西蒲原郡月潟村字大別當深澤佐一氏の園にあり。果實は品質は不良ではあるが貯蔵力強く、翌年 6 月頃までは完全である。

尙この外、神奈川縣橘樹郡、群馬縣勢多郡、石川縣石川郡、等は何れも古き歴史を持ち、その栽培品種も現在の様に統一されたものではなく、その數も頗る多かつたやうである。當時京都、石川、群馬、新潟の諸縣にて栽培ありと記されてある品種に淡雪と稱するものがある (第 8 圖)。



第 6 圖 早生三吉 (Wasesankichi)
(原圖) (新潟縣 清水氏)

梨栽培の比較的新らしく、明治の初年前後に栽植した地方は岡山縣 (廢應年間) で、奈良縣 (明治初年) は静岡、茨城、福島、及び岩手の諸縣と共に、

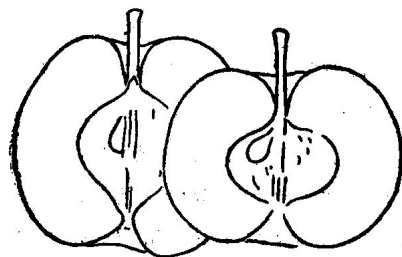
新興産地である。

栽培品種の推移は既に述べたる如く、地方的に移しき數に達し、全國的に統一されたものはなかつたが、明治 27~28 年頃長十郎種が発見されて以來、本邦における日本梨の栽培品種と面積に變化が起り、本種の栽培し易きと増収向で、然も熟期が盛夏の候である關係上、急速にその栽培が全國に普及したのである。又そ



第 7 圖 類産 (Ruisan) の巨木 (樹齡 130 年位)
(原圖) (新潟縣 深澤氏)

の以前に二十世紀が発見せられていたが、一時本種は黒斑病のために、伐採するものが多かつたがこれが防除方法の研究以來急速に全國的の品種として栽培面積が増大し、當時本種の黒斑病を防止するために、耐病性の品種として菊池秋雄氏が、菊水、八雲その他十數種の新品種を昭和の初期に發表して以來、日本梨の品種は全國的に統一せられ、長十郎、二十世紀、早生赤、



第 8 圖 淡雪 (Awayuki) 右 (原圖)
金龍 (Kinryū) 左

晩三吉、を主體として、その他には地方的の品種となつたわけである。然るに終戦以來早生赤、晩三吉、長十郎種にては時代の要求に満足することが出来ないで、これに代るべき新品种の育成發表が行われ、現に新興種は早生赤の更新品種として、新潟、福島縣にて

は栽培を開始している。更に興津の園藝試験東海支場にて、人工交配に依

る新品種が發表せられ、著者も昭和24年4月人工交配に依る新品種を發表したので、今後日本における梨の品種は二十世紀以外のものは相當の變化を來すものと思ふ。

中國梨は明治初年三田育種場に鴨梨（ヤーリー）、明治45年の恩田氏によりて、慈梨（ツーリー）が導入せられて、各地に試作されたが、一般的には普及せず終り現在では點々と各地に保存程度である。

西洋梨は中國梨と同様に、明治初年三田育種場に歐米より導入されたが、これ等の品種中 *Precoce*, *Bartlett* を残し、大部分の品種は不成功に終つたようである。これ本邦の氣候風土と原産地の風土と著しく異なる關係上かくの如き結果となりたるは當然の事で、今後本邦に適する様に品種の改良が行われるか、又は *Bartlett* の如き加工と共に栽培せざれば、西洋梨の本邦における普及は無理であると思ふ。

第2項 梨栽培の過去及び現況

梨栽培の過去及び、現況を知することは梨園の經營その他参考となるけれども現下の各種狀況からは推定程度であることは誠に残念である。

今昭和16年發行⁽¹⁾の農林統計によれば、昭和14年度における日本梨の全國栽培面積は10,700町歩、西洋梨は450町歩で計11,000町歩余である。これを昭和元年の12,000町歩に對比すれば大差はないが、昭和21年の統計は6,488町歩で面積は半減し、産額では昭和元年4,400萬貫に對し、1,300萬貫であり、3分の1以下の減少振りである。

以上の統計は、自然狀態に於ける變動でなくて、戰爭の影響であるから、この數字をもつて今後の梨栽培の指標することは當を得ないと思う。

次に昭和16年～21年における栽培面積及び産額を示せば第2表の通りである。

(1) 農林省農政局：園藝農產物要覽 昭和16年3月